

Photo by: 佐野 泰隆

人びとの
自立を支える。

「自立」とは、
人びとがうばわれてしまった、
生きることの自信や誇りを
取り戻すこと。
支援をうける人びとが
JENの活動に参加し、
自分たちの力で
自分たちの生活を
より良いものに変えていく。
それが、JENの目指す姿です。

啓子さんへ

お元気ですか？啓さんと私は、創立したばかりのJENで共に旧ユーゴスラビア紛争で被災した方々への緊急支援を行っていましたね。しばらくJENの活動から離れていた私ですが、母国ネパールで大震災が発生し、再びスタッフとして、支援の最前線にいます。

震災後、支援が届かなかった地域では、コミュニティの人びとが互いを支えあってきました。私はその話を聞いたとき、強く心を打たれます。『私は飢えてもパンを盗むことはできません。施しを受けるために頭をさげるくらいなら、私の手と足の指が落ちてしまうまで働き、生きていく。』これは、ネパールの人なら誰でも知っている歌です。この『自立の精神』は深く人びとに根付いています。それは、村人のこんな言葉からも読み取れます。「震災前は自分たちの力だけで生活してきた。でも、今回の震災はあまりに深刻で支援物資がないと生活を立て直せない。それが辛いよ。私たちは、村人たちの切実な声に配慮し、生計回復のための支援を通して自立を促すことを目指した活動を行いました。

ネパールでは、地震からの復興の他にも、新憲法についての反対運動や論争が止まず混乱が続いています。一日も早くネパールが復興し人びとに笑顔が戻り、憲法の改正によってこれまで迫害を受けてきた人びとが、平等な権利を得られるように願っています。

ネパール事業 責任者
ラジーブ・カナル



ラジーブさんと被災状況の調査中に会った子どもたち。「家が崩れて怖かった…」という声も。



ラジーブさんへ

ネパール大震災の被災者支援に出勤することが決まった時、カナダから駆けつけてくれて本当にありがとう。

ネパールの歌の話には、とても感動しました。支援を受けるよりむしろ、支援する側になることを選ぶ、強くて誇り高い人びとということが伝わってきました。そんな彼らすら支援を必要とする被害の大きさに、胸が痛みます。彼らのように自立する力も能力もある方々が、災害や状況が厳しすぎるために支援を必要とするとき、わずかな支えさえあれば再び自立に向かうことができますよね。的確な判断と素晴らしいチームワークで、ネパールの人びとを支えた今回の活動を心から誇りに思っています。

それから、「歌」と聞いて、旧ユーゴで一緒に働いた日々のことを思い出しました。ラジーブさんは、活動地へ向かう道やオフィスでも、よくネパールの歌を歌ってくれましたよね。再びJENで共に働くことができ、感慨深いです。緊急支援、本当にお疲れさまでした。

JEN事務局長 木山啓子

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。
最大で約40%が所得税の税額控除となります。

※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。



生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。



郵便局から
00170-2-538657
口座名 JEN



遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。



インターネットから
クレジットカードでご寄付いただけます。
(VISA、MASTER、JCB、AMEX)

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。



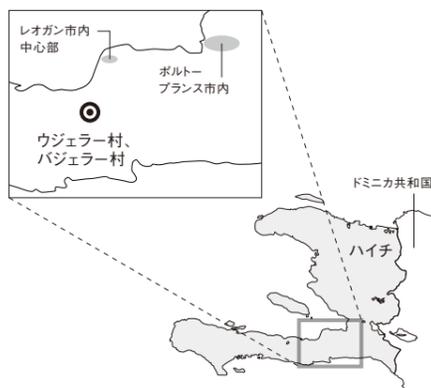
特定非営利活動法人ジェン(JEN)
東京本部事務局

〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-16 第二東文堂ビル7F
TEL: 03-5225-9352 FAX: 03-5225-9357

ホームページ
<http://www.jen-npo.org>

NPO JEN 検索

ハイチについて



○面積：27,750平方キロメートル(北海道の約1/3程度の面積)
○人口：1,046万人
○言語：フランス語、クレオール語
○主要産業：農業(米、コーヒー豆、砂糖、バナナ、カカオ、マンゴー、トウモロコシ)、軽工業
(外務省ホームページより)

ハイチは西半球の最貧国として知られており、以前より水衛生、教育、インフラ、保健など多くの分野で周辺他国に比べて開発が遅れていた上に、2010年の地震やコレラ蔓延、その後のハリケーンにも度々襲われています。更に開発が遅れており、失業率は40%にも上ります*1。ハイチでは、この約5年間に約74万人がコレラに感染し、8,825人もの人びとがコレラを原因として亡くなっています*2。

*1 出典…The World Factbook。2010年時点。
*2 出典…UNOCHA。2010年10月～2015年7月の統計



モニークさんが所属する水管理委員会が管理するキオスク。



水管理委員会と住民との話し合いの様子。委員会を構成するのは村人が選んだ代表や修理の技術者などです。



キオスクの水質検査中の水管理委員会のメンバーとJENスタッフ。「村人の命を守る」と、その目は真剣そのものです。



(写真) 給水所で水を汲み、10kg以上にもなる水桶をかきついで、長い道のりを家路につく住民たち。

ハイチ特集

自分たちで つくる、 衛生環境。

2010年1月に発生したハイチ大地震を受けて、JENは首都ポルトープランスに事務所を開設し、シェルターキットなどの緊急支援物資を配布しました。2011年からは、コレラなど水因性の疾患で命を落とす人が一人でも減ることを願い、水衛生環境の改善支援を行っています。現在は6つの地域で、キオスク型給水施設の建設、水管理委員会の再結成・育成と、住民への衛生促進活動を通じて、人びとが適切な衛生習慣を身に付けるための活動に取り組んでいます。

住民たち自身で構成する、 水管理委員会

JENの活動拠点となっているレオガン市街から舗装された国道を抜け、ここぼこの砂利道を車で45分。さらに徒歩で山道をしばらく進むと、ウジェラー村にたどり着きます。この村に住み昨年からは「水管理委員会」の会計を担当するモニークさんに話をうかがいました。「私の知人でも、コレラにかかった人がいます。誰もがきれいな水を手に入れられる環境づくりをし、コレラ感染を防ぐことが必要だとずっと考えていました」。

給水施設を建設しても、オーナーシップがないと故障した時、問題はそのまま放置されてしまいます。そこでJENは、給水施設を建設した後には、住民で構成する「水管理委員会」を村ごとに設置し、委員会へ管理方法などの技術的な研修を行います。また、住民へは委員会の役割と施設を利用することの大切さを伝えます。

「以前にも水管理委員会は存在したのですが、事実上稼働していませんでした。水道のパイプが壊れても、村には修理できる人がいなくて放置されていました。JENの呼びかけで水管理委員会が再結成された今、故障が見つかったと委員会に報告され、適切な修理を施すことができます」と彼女は語ります。

活発なコミュニティを作る

委員会は、貯水槽や給水施設、水道管の修繕などに必要な資金を住民たち

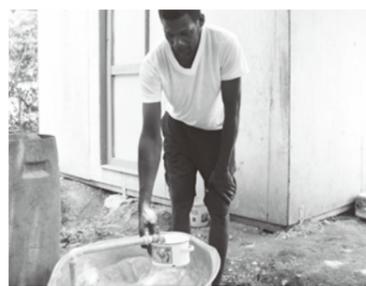
委員会の 心強い理解者



フルーリモンさん

「ここ数年で、村の水環境が改善しました」と語るのはバジェラー村の車の整備士、フルーリモンさん。彼は自費で、貯水槽から自宅まで水道管をひき、私用水道として使っています。私用水道は月利用料金が高いため、多くの人は公共のキオスクを利用しています。組織運営の経験があり、水の使用料の導入など、持続可能なシステムの大切さを理解している一人です。水管理委員会には、彼のような理解者が欠かせません。

VOICE 現地の人びとの声



自宅の水道で水を汲むフルーリモンさん。

キオスクに 寄せる期待



エルタさん

数年前までは川で水を汲んでいた、というバジェラー村に住むエルタさん。建設中のキオスクの前で、赤ちゃんの守をしながら友達と楽しそうに会話をしています。「昔は家から川まで片道45分かかっていたのですが、今利用しているキオスクは家から徒歩25分で行けますし、新しいキオスクが完成するとそれがたった10分になる予定です。とても便利になって嬉しいです」。



エルタさんが住んでいる近くの建設中キオスク。

から利用料として徴収し、現地コミュニティが自らの力で給水施設を維持・管理しています。「以前は利用料を支払う必要がなかったため、今も使用料を払わない住民がいるなど、まだまだ課題はあります。ですので、まず委員会は住民の意識改革に取り組みました。それが功を奏し皆が使用料を支払ってくれた時には、やつてよかったと感じます」。住民の信頼を得ることが彼女のモチベーションになり、彼女の地域に貢献したいという気持ちで、村の人びとの意識を自分たちで衛生的な水環境を守っていくという方向へ導いています。



モニークさん(左側)。村人からの信頼が厚く、会計担当に選出された。



私が10年の間に会った
各国の自立ストーリーを紹介します!

アズマツ・アリ

JENパキスタン・アフガニスタン事務所長。1973年パキスタン生まれ。2005年のパキスタン大地震を機にJENのアシスタント・スタッフとなる。2009年より国際スタッフとしてインドネシア、ハイチの緊急支援に出勤。現在は、パキスタン・アフガニスタン事業に携わる。

設備メンテナンスは欠かしません。
もっと学校の環境を
良くしたいと思っています



〈写真上〉建設中の学校を訪れる学校運営委員会のメンバー、教育局職員。

畜産知識を学ぶことで
コミュニティに貢献できる。
この仕事に誇りをもっています



畜産指導員が、事業参加者を戸別訪問し、エサのやり方などをアドバイスします。

お詫び

ニュースレター61号、p4のパキスタンの記事内に2箇所誤りがございました。お詫びして、下記の通り訂正申し上げます。

- 15行目 誤)ヤギと、飼料・飼育道具の配布 正)家畜の飼料・飼育道具の配布
- 左上写真キャプション 誤)JENは妊娠したヤギを〜(中略)〜こともできます。正)2012〜2013年には、テラ・イスマルカーン県で妊娠したヤギの配布などを行いました。妊娠ヤギからはミルクがとれ、それを売り収入源にすることもできます。

“ 私にとって「自立」とは、辛い事があっても、自分次第で乗り越えられる道があることに気づき、その道を歩み始めること。人びとの心に寄り添いサポートすることがJENの仕事です。私にとってこの仕事は、日々が学びの連続であり、自らの人生を充実させてくれる大切で意味のあるものです。”

アフガニスタン AFGHANISTAN

安心して学校に通える環境を 地域住民の思いが生む変化

アフガニスタンでの活動は、14年目を迎えました。当初は帰還民が再定住するため、支援として、住環境の改善、女性支援など様々な活動を行いました。現在は、学校環境の改善事業を行っています。アフガニスタンでは、多くの子どもたちが今も尚、「学校に行きたくても行けない」という状況におかれています。そこでJENは、子ども達が安心して学校に通うことができるように校舎やトイレなど施設の修復を中心に、学校環境の改善に力を注いでいます。活動を行う際には、両親、生徒、先生からなる「学校運営委員会(SMC)」との連携が欠かせません。JENは、SMCに対して管理費を自分たちで集め、記録・管理をする方法、学校設備のメンテナンスする方法等の研修を行います。そうすることで、JENが支援を終えた後も、しっかりと彼ら自身が施設を維持・管理できる様になるからです。

過去4年間に支援を行ったバルワン県のいくつつかの小学校でモニタリングを行いました。嬉しいことがありました。自主的に学校の周りに植え込みを作ったり、衛生施設の修理、学校の外壁の建設を行っていたのです。こうした自分たちの力で学校の環境を良くしようとする姿勢、これこそがともに目指してきたものです。

彼らがどんどん自主的に活動し、アフガニスタンの発展に寄与できることを願っています。

THE STORY OF SELF RELIANCE

J E N

自立のストーリー

JENがずっと大切にしてきたこと、それは『人びとの自立を支える』こと。

『自立』と聞いて何を思い浮かべますか。

災害や紛争に被災し、大切な人や住む家、仕事などを失い、

大きな心の傷を負ってしまっている人びとにとって、『自立』は、自分の人生をとり戻すこと。家から一歩外にでる、人に会う、社会的な活動に参加する…。そんなところから始まるのです。

JENは、一つひとつの活動を機会ととらえ、

生きることの自信や誇りを取り戻すことを目指しています。

自信や誇りは、何かに挑戦し達成したときに得られるもの。

日々の困難な暮らしに立ち向かうことも、そうした挑戦の一つです。

支援を必要とする人びとがJENの活動への参加を通して、

自分たちの力で自分たちの生活を良くしていく。

それが自立の第一歩だと信じています。

JENのスタッフとなって10年目のアズマツ・アリが、緊急支援活動の現場で出会った人びとの「自立のストーリー」をご紹介します。



インドネシア INDONESIA

ひたむきな情熱で 夢を現実に

2009年9月にインドネシアのパダン沖で起きた大地震発生直後からJENはシヤベルや「輪車、土のう袋など、ガレキ撤去道具が揃った「ツールキット」の配布などの緊急支援を開始しました。その後、小学校を対象に防災教育や、地域住民に向け生活再建の復興支援を2010年5月まで行いました。ここで私たちが大切にしたいことは、被災した地域の人びとと共に活動を行うことです。

現地スタッフとなったパダン出身のイラさんもその一人です。支援現場で女性の視点はいつも重要で

す。なぜなら、ニーズ調査や支援活動において、女性しか聞けないこと、入れない場所があるからです。「自立とは、自分の情熱や夢を自由に追いかけること」。そう話すイラさんは、JENでのミッションを終えた後、人道支援の世界で働くために大学院へと進みました。学業を終えた彼女は今、カタルの人道支援団体で夢と情熱を形に変えています。

JENは、年齢や性別で判断せず私の能力を信じて仕事を任せてくれたことが自信につながりました



〈写真上〉元・JENインドネシア現地スタッフイラさん(当時22歳)。



パキスタン PAKISTAN

避難民も地元住民も 共に学ぶ

2005年10月、カシミール地方を襲ったパキスタン大地震への支援活動を行って以降、度重なる地震や洪水などの自然災害の被災者支援を行ってきました。現在は、政府軍による反政府武装勢力への掃討作戦から避難してきた国内避難民を対象に畜産の支援を行っています。

この活動では避難民と地元住民から選ばれる「畜産指導員」の育成がとても重要です。指導員は、家畜に関する知識を広めたり、予防接種を行うだけではなく、家畜の飼料や道具配布の際にも、場所のアレンジや情報拡散にと幅広く活躍してくれました。

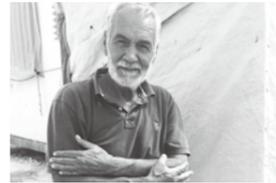
その一人、ディラワールさんはこう語ります。「これからの目標は、経験を積みながらさらに家畜に詳しくなつて、村の人たちにその知識を広げていくことです」。

若くてやる気に満ち溢れたディラワールさんは、JENの支援が終了した後も畜産指導員として腕をみがき、活動を続けていくことでしょう。希望を胸に、日々、自立への道を歩んでいるのです。

ヨルダン
Jordan

思いやりの心が仲間を笑顔に

シリア難民が暮らすヨルダンのザイター難民キャンプには、約8万人の人びとが暮らしています。JENがここで活動を始めてから4年目に入りました。キャンプの3つの地区で水衛生分野の運営を任されているJENは、住民と共に「水衛生委員会」を設立し、トイレや給水タンク等の施設の維持・管理や、健康的な生活を送るための情報発信を行っています。委員会の活動は時に、その枠に留まりません。障がいを持つ息子さんと高齢の母親が公共のトイレに行くのが難しいと知った、委員のユセフさんは、親子の家の隣にトイレを建設しました。母親は「外のトイレに行くのは大変でしたが、楽になりました。また、若い人が週に1回掃除に来てくれて水を運んでくれるので、とても助かっています」と喜んでいました。難民キャンプでの避難生活はいつまで続くかわかりませんが、そんな中、このような相互扶助



「人手も材料も何とかなりました。役に立てればいいと思って」。トイレ建設をよびかけた委員のユセフさん。

助は住民にとっても大きな力になっています。

イラク
Iraq

衛生知識を広げる、学びへの意欲

イラク国内で激化する戦闘により国内避難民は現在約360万人にも上ります。* JENが活動を行う国内避難民キャンプでは、多くのボランティアが活躍しています。「人の役に立ちたいと思ったんだ」と話すコミュニティ衛生プロモーターで、避難民のシャウカトさんもその一人です。彼はJENの活動に積極的に参加し、キャンプに住む人びとに衛生の促進活動を行っています。以前は大学進学を目指していま



衛生プロモーターの集まりで、節水キャンペーンのアイデアを説明するシャウカトさん。(写真・中央左)

いつか故郷に戻るときにもその前向きな姿勢が彼を支えてくれると信じています。

*出典：UNHCRより、2014年12月時点

東北
Tohoku

出会いと学びを、今後の糧に

東日本大震災から4年8ヶ月、JENは震災発生直後から死者・行方不明者を合わせ約4000名の方が犠牲となった宮城県石巻市を拠点に活動してきました。震災直後から国内外の支援者の皆様に支えられ、瓦礫撤去や炊き出しボランティア派遣、日用品の配布、地域産業回復、コミュニティ再建、地域の活性化を目指した交流等、ニーズに柔軟に対応した支援活動を行ないました。被災された地域の方とは、話し合いを重ね活動を一緒に作り上げてきました。石巻の活動では、外の人との交流の輪を広げようと奮闘する人、起業する人、住民を上手に巻き込んで地域活性化を図る人など、自らの意思で行動される姿に沢山出会い、多くの学びがありました。JENは今後、石巻のみならず、被災地全域を対象に復興支援活動を続けてゆきます。これまで多くの方々を支えられた思いを大切に、今後の



津波の被害を受けた遊具を撤去。小規模公園に新しい遊具を設置しました。

課題を乗り越え、さらなる挑戦を

スリランカでの活動は12年目に入ります。JENは常に「持続可能性」と「コミュニティの自立」を意識し活動を行ってきました。現在は、北部での帰還民を対象に農業協同組合の活動を通した自立支援を行っています。JENが製粉機や作業所の提供、運営管理ワークショップを行ったある農協では、米粉、トウモロコシ粉などの製品を作っています。ある日彼らが完成した製品を市場で販売しようとしていた矢先に、問題が発生しました。販売するためには年間4000ルピー(約3600円)の「販売許可証」が必要だとわかったのです。これは農協が課題に対してどう乗り越えるか経験するチャンスでした。農協は議論を重ね、3か月かけて全メンバーからその費用を集めました。この農協で書記を務めるガウリーシュワランさんは「今回はメンバーが少なかったので時間がかかりました。今後はメンバーを増やして、沢山生産販売し農協と村の発展に貢献していきたいです」と意気込んでいます。



12年におよぶ避難生活を体験した書記のガウリーシュワランさん。毎日が新しい挑戦と語る笑顔は輝いています。

ネパール
Nepal

ネパール支援活動へのご協力、ありがとうございました!



通学用のスクールバッグと、筆記用具、お弁当箱や水筒などの学用品は、一人ひとりに手渡します。



お揃いのバッグを背負って嬉しそうに帰っていく生徒たち。山道を1時間ほど歩くこともしばしばです。

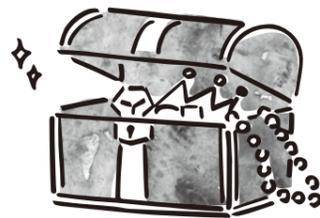
甚大な被害をもたらしたネパール大震災。JENは6月より緊急支援活動を行ってきました。大地震とその後の余震に被災した山岳地帯は、小さな村が点在しています。アクセスが悪く、多くの村に全く支援が届いていませんでした。そこでJENは、カヴル郡、シンドゥルバルチョーク郡、ヌワコト郡の全壊に近い512世帯を訪問し、何が必要か調査しました。そして毛布などの寝具、食器などの生活必需品を1650世帯へ、学校に通うための学習用品を2600人の子どもたちに配布しました。支援活動には困難が付きものです。雨季の8月、朝通った道路ががけ崩れで封鎖となり迂回路を通り夜中に帰り着いたこと。憲法改正を巡る混乱で道路が封鎖され、支援物資の調達に支障がでたこと。そんな時は、人びとがかけてくれる言葉が心の支えとなりました。JENが地元縫製工場にお願いして作ったリュックサックを背負った生徒たち。その姿を見て「こうして同じものを使うと、自然と子どもも大人も団結して頑張っている気がします。本当にありがとうございます」と校長先生が言ってくれた言葉。5年生のシスターちゃんは「勉強を続けて、看護師さんになるの」と夢を語ってくれました。日本のみなさんからの暖かい思いが「生きる力」として現地の人びとに伝わっていると感じました。JENの活動はこれで終了しますが、これからも変わらずネパールの人びとを応援していきます。

あなたのおうちに眠っている「お宝」が、現地の人びとの自立を支える活動に活かされます! 例えば...

書き損じハガキ 約7枚
↓
イラクの学校で子どもたちが使う教科書 1冊



モノで寄付する お宝エイド®



どんなに古くても、壊れていても大丈夫! 「こんなものでも値段がつかないか?」と思ったものでも、まずお送りください。

取り扱いアイテム

- 切手・記念コイン・古銭
- 金券・商品券・図書券・テレカ・書き損じはがき
- 貴金属・アクセサリー
- 携帯電話・スマートフォン
- ブランドバッグ・ブランド品
- カメラ・時計

※「お宝エイド」®はT.M.ユニケーションサービス(株)の登録商標であり、本取り組は実用新案申請済の事業です。また、本取り組は「おたからや目黒山手通り店」のみの取り組で、他の「おたからや」店舗では取り扱っておりません。

3 お宝をお送りいただいたから、2~3カ月後に領収書が届きます



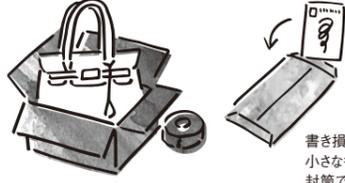
領収書とともに、買取内容の明細書もお送りいたします。

2 ゆうパックの着払いで、「おたからや目黒山手通り店」にお宝を送ります



伝票の品名欄に、「JEN宛 お宝エイド」と明記してください。

1 お宝を梱包します



書き損じはがきなど小さなものは封筒でも送れます!

参加方法